

諸井 薫

女を叱る文句

諸井 薫

女を叱る文句

ボキヤブラリ―

文藝春秋版

女を叱る文句 ボキヤフラー!

平成三年二月一日 第一刷

平成三年二月二五日 第二刷

著者 諸井 薫 もろい かおる

発行者 豊田健次

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二  
電話代表(〇三)三二六五―二二一

印刷所 凸版印刷

製本所 中島製本

定価はカバーに表示してあります

© Kaoru Moroi 1991

Printed in Japan

ISBN 4-16-344840-3

## 目次

DINKS 哀しや 7

〈女の論理〉の言いなりになるな 16

「結婚しない女」が年をとると 25

おんなの適職 34

結婚披露宴がこうなってしまった理由<sup>わけ</sup> 43

性的揶揄癖 48

芸者は男たちの夢だった 52

正義はいずこ 65

野獣死すべし 74

胆汁質人間の犯罪 83

子捨て狼 92

へんな広告 101

カラオケ狂い 110

カタカナ汚染 119

「秘書」とは 128

父の責任 137

嗚呼ジャパニーズゴルファー 146

男の顔 155

私物化の時代 164

「かけそば」の読み方 173

ひばり嫌い 182

政治家の顔 191

「経済行為」をどう考えるのか 199

“老際”の輾転反側 203

朝餉への我執 207

男が手術を受けるとき 214

装画

パウル・クレー

©1988

協力グリフィンス・コーポレーション

女を叱る文句

ボキャブラリー



## DINKS 哀しや

DINKS という新語をよく耳にする。

なんのことかと若い人に訊ねたら、「ダブルインカム、ノーキッズ」、すなわち二人で稼いで、子供なしという夫婦のことなのだそう。

それなら、昭和二十年代後半から三十年代にかけての日本の都市部の新婚夫婦はほとんどそうだったわけで、事改めて新しがるほどのことはないじゃないかと、その頃のことを思い起こした。

昔から下じもでは「一人口は食えなくても二人口は食える」と言い慣わされてきたが、戦後の窮乏から脱出しきれないでいた昭和二十年代後半は、下じもでなくとも若い夫の稼ぎだけで妻を養えるというのは、ごく僅かな恵まれたひと握りか、後ろめたい荒稼ぎをしている連中に過ぎず、大多数の新婚者は共稼ぎをすることでやっと二人口を養っていた。

そんなふうだから子供を作りたくても、それでシングルインカムになったらたちまち二人口が干上がって共倒れになるのは必至だった。『時にあらず』と先延ばしにするしかなかった。それに、無理をして出来るにまかせて産んでいたら、その子達にちゃんとした教育を施してやる経済的自信が持てようはずもない。恐る恐るまず一人産み、その子がきょうだいの味を知らないのでは不憫だと、もう一人は作ってもそれ以上は打止めにするというのが、その頃の風潮だった。

つまり当時のDINKSは経済的事由に基づく、耐乏の必然的結果に過ぎなかったのだが、いまのDINKSは貧しさゆえの変則は含まないのだそう。

すなわち、夫は颯爽たるエリートもしくは才能に恵まれた年齢不相応の稼ぎ手で、妻はただの『腰かけOL』とは違い、職業によって自立を目指す誇り高いキャリアウーマンという組み合わせでなければならない。もちろん立派な親がついているせいだろうが、住まいは優雅な分譲マンションと相場はきまっている。それも通勤に一時半もかかるような辺鄙な新開地ではなく、東京でいえば少なくとも還七の内側でないと、DINKSを自称するには肩身が狭いらしい。

作ろうと思えば子供なんかいくらでも作れそうなのになにそうしないのは、妻の仕事に支障が生じるからかといえ、それも違う。第一いまは産休制度など働く女性の母性保護の思想が徹底しているから、それほどのキャリアウーマンがお産で職を失うという心配はまず

ない。

ということは、産める条件が整っているのに産まないわけだが、その理由は「いつまでも恋人同士の新鮮さを失いたくないから」なのだそうだ。

ここに至って、この連中はなにやらとんでもない誤りを犯しているのではないかという心配が頭をもたげてくる。

若い人が世間に逆らって、傲慢な生き方をするのは、いつの時代にもあることだが、これが風潮化しつつあるとなると、他人事ながら、黙ってはいられない。

\*

こういうことをいかにも新しい進んだ生き方でもあるかのように思い込み、憧れているのはだいたいが妻の方で、夫の方は深く考えるふうもないまま、*「婦唱夫随」*をきめこんでいるかのようだ。

なぜそうなのか。一つには女がやたらと働きたがるようになったからだ。といって、女が急に勤勉になった、というわけではない。近年とみに家庭婦人の就労ケースがふえ、男達にまじって出勤していく女の姿が目立つようになったのを見るにつけ、いても立ってもいられなくなったからに他ならない。加えて、彼女達の出かけていく先が何やら面白おかしく楽しそうに思えてしょうがないからである。

が、女達はその本音を口にはせず、女性の自立と言い立て、お国もその尻馬に乗って男女

雇用機会均等法といった法律まで作るに至ったから、女達は勅命を受けた薩長軍さながらに、それを錦の御旗と押し立て、首をかしげる男共を沈黙させた。

女が男に伍して働ける環境がそれによって整ったかといえば、簡単にいくはずもない。どうやって山積するムリを除去したものと、実は頭を痛めているわけで、この風潮をなんとかホンモノにしようと思願する女性解放運動家達は、尻押しのため家事負担の男女平等を叫ぶに及んだ。しかしこれだけでは男共を憂鬱にさせ逆に不満を助長しかねないと按じたのか、もっと優雅でイメージのよいファッショナブルな「新しい夫婦像」として、このDINKSを流行させようと思図した、というふうに勘ぐることも出来なくはない。

DINKSの狙いは、夫にブツブツ言わせずに妻がのびのび働けるように、ということにあるのはいうまでもない。「いつまでも恋人同士の新鮮さを……」などと言われると、お人好しであり賢いとはいえない若い男達はコロリと騙だまされるかも知れない。結婚してからも女房と電話で話すだけで胸がキュンとなったり、外で待ち合わせて胸高鳴らせる男がいるとしたら、それは余程浮気なカミさんを持った気の毒なヤツか、そうでなければ、残る半生に恋人の出来る可能性のない例外的自信喪失者以外にはあるまい。

ま、それもいい。恋人同士でいようというのだから、きつと、帰りがけに待ち合わせて外で酒を飲んだり飯を食ったり、ときには映画や芝居やコンサートにも出かけたりするのだから。なにしろ普通は二本の腕で支える家計を四本でやるのだから、経済的にはやれないこと

ではない。だが、そんなことを続けていたら家の中はどうなるんだろうか。

遅く二人で帰ってドアを開けると、夏場なんか、腐れかかった生ゴミの臭いが、ウツと言いたくなるくらい鼻をつくのではないか。洗濯物は乾燥機が乾かしてくれるからいいかも知れないが、長時間締めきって蒸れた部屋の中ならダニも繁殖し易いだろう。なんとなく湿っぽく熱気を含んだベッドで、ムズ痒い<sup>がゆ</sup>感じに耐えながら、恋人同士のように新鮮な愛を交わし合うことになるわけで、余程鈍感で無神経な似た者夫婦に違いない。

それが嫌なら、家に帰りついてからの男は勤め先で使うエネルギーに倍する労力を費して、大車輪で家の中を快適にするための作業に身を挺すしかなく、ほっとしたときは恐らく、就寝予定時刻をはるかに過ぎているということにもなりかねない。

外目には優雅なDINKSかも知れないが、その実は慢性睡眠不足気味で、「あいつ結婚してからというものの、なにか仕事で冴えなくなっただけ」と、上の人間の首をかしげさせるようなことから、エリートがタダの人になり下がる可能性だって大いにあり得る。

無神経、鈍感という資質は、この世を生きる上で役立つことも少なくない。人が嫌がることに気にならないのだから、その分サクセス・チャンスが多いといえなくもない。が、先々に思いが至らない鈍感さばかりは、危なっかしくて見ていられない。

DINKSなどと粋がつてみたところで、生涯働かなくてもノンキに暮していけるという資産家のボンボン、お嬢さまとはこと違い、所詮は「働かざる者食うべからず」の労働者の一

人であることに変わりない。

同じ年の連中に較べれば少しは収入が多いということはあるだろうし、先の先まで間違いなく下積みというのとも違うだろう。しかし客観的に見ればただか中の上で、その程度では豊かで安定した将来が約束されているとはいえない。そういうのが、いくらダブルインカムでちょっとゆとりがあるからといって、イイ気になって派手に暮らしていたら、「アリとキリギリス」の寓話ではないが、後々してもどうにもならない悔いに身を揉むことになる。

分りきった先々から目をそむけ、いまがよければと浮かれているのは健全な生活者の態度とはいえない。もしもそれで先に不安を覚えなかったら、世間はそれを楽観主義者とは呼ばず、単なる莫迦<sup>ばか</sup>と蔑み<sup>さげす</sup>信用しようとしはないはずだ。DINKSが大胆にも「ノーキッツ」を宣言して憚らないのを知って、とっさに思ったのはそのことだ。

子供は天からの授かりものであって、いつまでも恋人同士のようにでいたいからといって要らないとは何事か、などと古めかしいことをいうつもりはない。いまは産みたくないういうならそれでもいいし、安んじて産むだけの条件が整っていないからというのも大いに分る。だが、「子供は要らない」と先々にわたってまでそう宣言されると、「ホントかね」と確めたくなる。

だいたい、「いつまでも恋人同士でいたい」と思う程に好きな男の子供を欲しくならない女がそんなに大勢いるとは思えない。それが素朴な牝の本能であり、性欲と素直に結びつく

欲求だからだ。

もう少し新婚生活を楽しみたい、もう少し仕事の基盤が固まるまでは我慢する、もう少し生活にゆとりが出来たら、という暫定的不要論なら分るのだが、将来にまで及んで要らないと言いつ切るなら、余程の哲学があるに違いない。その哲学の信奉者がDINKSの名の下にふえ続けているというのなら、われら旧人類にも分るようにその革新的哲学とやらを、誰か代表して解説して貰いたい。

たしかにいまの世の中を眺めると、なんで苦勞して子供なんか持ったのかといいたくなるダメ餓鬼に泣く親が多いのは事実だ。それにサラリーマンという一代限りの稼業は、わが子に継いで貰わなければならないというものなんかないから、それならいっそ、というのならまだ分るのだが、DINKSの思想(?)は果してそこまで思い詰めてのことだろうか。それは買い被りというもので、おそらくは深くも考えず、ノンキにそんなことを口走っているだけに違いあるまい。

問題はそういうのに限って、高齢出産の限界年齢に近づいてから慌てて産みたがり、そのときになって、(なぜあのときムリをしてでも産んでおかなかったのか)と、後悔の臍(はら)を噛むにきまっているからだ。

子供を育てて後悔する親もたしかに多いが、子を持たない晩年の孤独の嘆きをどのようなものかも知らずに、あまり口幅つたいことを言うものではない。それでもなお「ノーキッ

ズ」を標榜するというなら、四十年後、DINKS 僭称者は皆打ち揃い、なお恋人同士のよう  
うに手をつないで、しわだらけの顔に明るい笑みを誇らしげに浮かべて「さあどうです」と  
見得を切って欲しい。果して何人が残っているか、大いに見ものではないか。

\*

仕事で関わりのある二十代後半の女性新聞記者がいる。この人は新婚一年目で夫君は少壮  
弁護士とかだから、まさにDINKSの代表選手のようなものだ。そこで「いまはやりのD  
INKSとやらをどう思う？」と訊いたところ、「ええ、よく分ります。私達もそれでいうな  
らDINKSですから」という答えが返ってきた。しからば貴女もノーキッズの信奉者なら  
んか、と問い詰めたところ、「いまのところは」と言う。「いまのところというのなら具体的  
な計画をお持ちか？」と重ねて訊ねると、「正直のところ、切実に子供が欲しいという気持  
はありません。別に子供が嫌いというわけではないけれど、いまは子供を作ることによつて  
仕事から長期間離れる気にはなれません。でも先になつたらどう気持が変わるか断言できま  
せんから、ノーキッズと正面切つて言うつもりもないし、私が三十を過ぎた頃、彼がそのこ  
とをどう考えるかも分りません……。ただ私達のような仕事を持つ妻にとつて出産とい  
うのはどこまで行つても大問題で、おっしゃるように現実逃避かも知れませんが、仕事にやり  
甲斐を感じている女の人がある仕事は失いたくないという気持から、ノーキッズ」ってつい  
言つてしまいたくなるのは、とてもよく分るような気がするんです。いくら男の人が協力的